

桑原武夫集 4

1954
1
1956

桑原武夫集

4

1954
）
1956

岩波書店刊行

桑原武夫集 4

第四回配本(全十卷)

一九八〇年七月一八日 発行

定価 四〇〇〇円

著者 桑原武夫*

発行者 緑川亨

発行所 株式会社 岩波書店

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五番
電話 〇三六五二四二二
振替 東京六三六四〇

印刷・三陽社 製本・青木製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 桑原武夫 1980

凡 例

一、この集は、桑原武夫の作品の中から、代表的ないし主要的と思われるものを、著者が自選し、これを年代順に配列し、十巻にまとめたものである。

一、配列は、ジャンルの如何を問わず、すべて発表年代順によつた。ただし、編集の都合上、厳密に順序に従えなかつた場合も稀れにある。

一、初出の場所と年月は各作品の末尾にしるした。

一、挿入写真のうち、桑原撮影のものには*印を付した。

一、テキストは原則として最近のものを用いた。また、今回若干の訂正を加えたものもある。以後これを定本とする。

一、反訳、対談、座談は収めないが、調べのつく限り、全著作目録には記載した。

一、第十巻には、全著作目録、年譜、索引を入れる。

目次

凡例

一書 考史遊記	2
アマクチの流行	17
榊亮三郎先生のこと	21
平和運動と誓い	32
文学批評と価値判断	47
『百科全書』の芸術論	74
啄木の日記	146
『七人の侍』	170
旧友の文章	178

日本知性への注文	185
敗戦前後	199
自己解説	207
学問を支えるもの	216
しろうと農村見学	220
河上肇『自叙伝』	268
トルストイ『戦争と平和』入門	291
一九五五 『近松物語』の感動	354
ソ連の宗教	361
アルメニア紀行	365
ショーロホフ五十の賀	387
ソ連・中国の乾燥性	397
社会主義国の女性雑感	404

四川紀行	419
一五美 日本文化論のあり方	452
明治の再評価	465
博雅の士 貝塚茂樹	469
漢の高祖の『大風歌』について	476
歴史における人間の尊重	488
恐怖政治の大天使・サンⅡジユスト	500
幼いころの絵本	538
森外三郎先生のこと	543
自 跋	561
挿絵目録	583

1954



『七人の侍』より

考史遊記

——島原半島旅日記——

十一月六日、諫早

旧友ながら伊東静雄は日本近代詩人中、日本語駆使のテクニックにおいて、発想法の鋭さにおいて、もっともユニークな詩人だ、と私は信じている。その理由は、彼の詩集のあとがきにしるしたから（第三巻所収『伊東静雄の詩』）、ここではくりかえさない。この春、病死した彼の遺骨はただちに故郷諫早にはこばれて、私は敬礼のいとまもなく、残念だった。たまたま九州大学で集中講義をたのまれ、またそのあと学会があつて二週間福岡に滞在することとなつたので、展墓の機会をうかがつていたところ、七日の土曜が運動会で休講になつた。そこで金曜、夕刻講義をおえると、直ちに放送局にいつて約束の録音をおえ、駅に車をはせて長崎行の列車をとらえた。二等は超満員で、三等は空席が多い。旅をして、その地のインテリと話をしてるうちはよいが、一たび汽車、バス等にのると、人々の会話はさっぱりわからない。よくとれば旅趣であり、悲観的にとればディス・コミュニケーション、意思疏通の断絶である。二等にしか乗らぬ人は日本はどこもかしこも同じだと

いう。

佐賀とよぶ声は、私に鍋島の猫化けと今一つのことを想起せしめた。およそ二十年前、私は九大の進藤誠一君とこの駅へ特高に引っぱりおろされかかった。もとより私に大それたことのできようはずはない。ただ私はそのころ堺刑務所入りをする前の片岡鉄兵と友人の下宿で知合い、ボードレールの『悪の花』を論じ合ったりしたことがある。私は彼をいつも鉄兵さんとよんでいた。その鉄兵さんの話を車中ではじめ、プロレタリア文学論から中野重治論にまで及んだところ、突然、前に坐っていた人相の悪い男が、進藤君にちよつと洗面所まで来いという。特高である。名刺もたぬ烏打帽の進藤君を彼はなかなか九大の先生とは認めなかった。次に私を呼びこみ訊問した。私は高校教師の身分証明書を見せて、やつと身分はわかったが、罪人を「さん」づけしたことが容易になつとくできない。ようやくわかつてくれたが、学校の先生が車中でつまらぬ話をするものじゃない、証明ができれば佐賀駅で下りてもらふところだった、といって吐られた。

諫早の宿へは夜ふけなのに、伊東君のお姉さんの江川ミキさんと郷土詩人上村肇さんが来て下さった。初めて会って故旧のごとく追憶談一とき。

十一月七日、諫早・雲仙

朝はやく起きて窓をあけると、下は川。葦のようなものがはえ、アヒルが泳いでいる。少し上流

にどっしりした石の眼鏡橋が見える。こは町の真中というのに何という静けさ。毎日ジェット機の爆音に抵抗しながら講義する福岡から来たから、一そう静かに感じたのかもしれない。石橋の美しさをあかず眺めていると、江川さんが迎えに来られた。いきなりあの橋の名は何といい、いつ出来たか、ときく。名は眼鏡橋、およそ百二十年前のもので、いかなる大水にもたえたという。町の人は長崎の眼鏡橋より遙かに上等だという(そして、それは正しい)。そのカマボコ形の橋をこのあいだ保安隊がジープで渡る練習をしたという。郷土の人々が大切にしている宝物を、粗末にするというのは、国を守ると称する保安隊が本当は国を守ることより、よそへ出て行くことになりそうなの、今の情勢を露骨に反映しているのだろう。保安隊のことで口出しして「赤」にされてはたまらぬから、町で批判めいた声はおこらないだけである。

車で墓地へゆく。ご両親や次々と早死にした兄さんたちの墓の間に伊東静雄の骨が埋めてある。香をそなえて、ふりかえると赤煉瓦の刑務所がある。西南戦争後の建築で、明治初期の西洋建築の典型的なものだ。囚人がみずからたてたのだという(人はなぜそういう説明をしたがるのだろう。網走監獄のときもそうだった)。刑務所の建物のもつ独特のいたましさ、あれは囚人がみずからの自由を奪うところのものを作る、その切なさが反映するからだと考えるのは、私の神秘的感傷主義である。それを背景とした折りからの晴天に、うれた柿の実が二つ三つ枯枝に鮮やかだ。その下のコイモの畑。この景色は恐らく伊東の趣味に反してしまい。

車をかえして城山に登る。樹木の多い、しっとりしたこの田園都市を見下ろす眺めはなかなか美しい。いまこの城山の中腹に伊東の詩碑をたてる計画が進行中で、私たちはその敷地を相談した。江川家へ参上して、妹さんにも久々ぶりでお目にかかり、伊東の好物だったという梅酒と菓子をいただきながら、故人の写真の下で閑談一とき。バスに乘ろうとする私の折りカバンに江川さんは柿とミカンを一ぱいつめこまれる。バスにくりかえし会釈される姿に遠ざかりながら、私は田舎の伯母さんに別れてきたような気がした。

愛野に、島原の乱で殺したキリシタンの首を長崎まで運ぶのが面倒くさくなって、うずめた首塚があるときき、車窓から注意していたが、無情なバスは疾走して、目にもとまらなかつた。雲仙についてホテルに泊る。昨夜から再読をはじめた『パルムの僧院』をカバンから出したが、あまり好天気なので、満員のバスで仁田峠にゆく。まさに人の山である。普賢岳に登る。會遊の天草や三角をのぞむ眺望と雑木の紅葉、いずれも悪くはないが、多少山野を歩いてきたものにはさして珍重すべき風光でもない。要するにここは、温泉(うんせん)に「雲仙」という字面のよい宛字をし、宣伝によって戦後、日本観光地中の上位にのしあがったにすぎない。修学旅行の子供を多く見かけたが、何のためにこんな所へ連れてくるのか。東京見物の方がはるかにためになるう。

悪口はいったが三百メートルを登降したことは身体を好調にした。夜、雑誌『平和』のための原稿十八枚を一気に書き上げることができた。ペンをおいたのが二時半。

十一月八日、雲仙・島原

部屋にとじこもって『バルムの僧院』をぐんぐん読上げてゆく、楽しい数時間。フェランテ・パ
ラのような民衆詩人が、かつて日本にいただろうが、いやフィクシヨンの人物としても作りえただ
ろうか。スタンダールが、パラの感情は清純だが、それを詩にしようとするために何かが消え、作
品として一流でない、という意味のことをいっているのは面白い。これは今の日本の民衆詩にもあ
てはまる。国を愛する人々が『祖国の砂』を歌い出す感情は立派だが、詩作品として、そこから何
ものかがやはり消えている。

大牟田行き of 汽船に連絡する最終バスはひどくこむとるので、やむなくファブリスと別れ、一
つ前のバスにのる。出しなに島原の城はどこ、ときくと、ホテルの人はバスの終点のすぐ前だと教
えてくれた。乗船場で満員だった観光客がほとんどおり、二、三人しか残らない。日本人の歴史嫌
いは今にはじまったことじゃない、などと思いつつながら終点から町角一つ曲って、城の石垣が見えた
とき、私は自分こそバカだったと気付いた。少しの破壊のあともない、その整った城壁、それはキ
リシタンの立てこもったところではありえない。ここは、その乱暴な収奪と残忍な信仰弾圧によつ
て、乱のみなもとをなした松倉氏の居城（森岳城）なのである。一揆の衆はここを攻めて、ついに抜
きえず、退いて有馬の故城、原城を修理して立てこもったのだ。眠不足でばんやりしていたとはい

え、平素歴史好きをもつて自認している人間が、原城が島原の町の近所にあるかのように錯覚したことを私はみずから深く恥じた。天守のあとにまで上つて小便をひっかけると、直ちに取つて返し、駅に行つたがその方面へゆく軽鉄は出たばかり、次の中では戻れず、明朝の講義に間に合わぬ。汽車賃九十円のところだから、自動車を飛ばしてもと思つて、電話で交渉すると二千七百円。私は再遊の責任をみずからに課して船にのるの他はなかつた。

十一月十二日、福岡

島原から帰ると翌日、国史研究室の若い人に、島原の乱についての文献で私に読みの下りようなものをみな出してくれと頼んだ。そして、クレリアが不義の子を生んで死ぬのを待ちかねて、それらの文献の早読みを開始した。まず驚いたことは、日本の思想の自由を守る闘争史上、最大の戦いが戦われたこの乱について、これを正面から取上げ、宗教的、思想的、政治的、経済的に総合的に研究した、基準たるべき単行本が、まだ出ていないらしいことであつた。戦後、世人はヒューマンズムを合言葉とし、思想の自由の尊さをといてやまない。もとより歴史家は軽々に時流に動かさるべきではない。しかしながら、人間としての歴史家として、言論思想と信仰の自由を規定した新憲法の精神に心から賛同する場合、この三百年前の自由の戦いに無関心でありうるだろうか。近ごろナシヨナリズムの流行について、伝統の語が軽々しく用いられるが、古いものなら何でもよいとい

うのなら、革新を語ることはやめねばならぬ。そこで観念としての伝統でなく、「もの」を提示しなければならぬが、それが一つ覚えの法隆寺にあらずんば、「寺子屋」のささやかなレジスタンスであつて、島原の乱を例示されたことを聞かない。私は怠慢という言葉を使いたくなる。

キリシタン研究家というものを、私は由来好まなかつた。思想の自由の弾圧をあたかも不可避の自然現象のごとく受取り、生き死にの問題をただ感傷的好事ないしは異国情調的に取扱いうる、その鈍感さが腹立たしいのである。しかし、そのため私がそちらの方面の読書を怠つたことは、やはり私の責任であつた。姉崎正治博士には一度だけお目にかかつてことがあつたが、大学生の私には官僚的学者のように見え、その著書をほとんど読んだことがなかつた。今度一、二冊よんで、被迫害キリシタン家族の実証的調査などなかなかすぐれたものがあり、その出た大正年間から今日までにどれだけ進歩したか疑問だと、二十六年前の不明を謝した。京都の市兵衛なるものは、六歳のときにその父がころんだ(転向)という以外に何の確証もなく、みずからもキリシタンでないと誓つているのに、密告によつて一六四七年(島原の乱後十年)三十四歳で召捕えられ、以後二十二年間収監されたままついに獄死している。この一例にも明らか、キリシタンの徹底的な残忍な弾圧の理由は何だろう。外国の侵略的野心などというのは、幕府の公式的説明で意味をなさない。台湾すら長く保ちえなかつたものが、元亀天正以来軍事的トレーニングをつづけ、また統一政権のできた日本を取りうるはずがない。姉崎博士は、してはならぬということを取敢えてする者に対する「専制政

治家の憎悪」と解したが、それでもまだ不十分である。封建的専制君主のヒューマンイズムに対する恐怖と見なければならぬ。

さらにキリシタンと幕府との抗争は、近代と中世との戦いともいえる面をもっている。もとより宣教師の祖国は、なお旧制度の下にあり、宗教裁判すら行なっていた。そのジュスイットを近代といえるか、という疑問が直ちに生じるであろう。しかしヤソ会は、ともかくルネサンスと宗教改革以後の産物であった。そして自然法思想と暴君放伐論(反抗権)の学説は、すでにヨーロッパにあったのである。私たち日本のインテリは、彼らがパスカルの敵であり、ルソー、ディドロを圧迫したという点だけを覚えこんで、これをかんとんに反動者と考えやすい。しかしそれはマルクス青年が、ややともすればサンシモンやフーリエはアホウであり、マッハはバカだと思ひ込むのと同じである。ジュスイットは、むしろ科学を尊重し、近代主義的な面をもっており、ヨーロッパ各地にヒューマンイズム的な新しい学校制度を樹立した(パスカルはその点、復古的といえる。デカルトはジュスイットにつらなる。宗教たるかぎり、無神論的なディドロをたたいたのは当然の理である)。

キリシタンは近代そのものでなくとも、近代に向うところの一つの道であった。日本において特にそうであったことは、否定できない。パレンが領主にも人民にも平等な物言いをすることは、当時の日本人をひどく驚かせている。セミナリオ(学院)は当時の日本におけるもつとも民衆的、ヒ

ユーマニズムの学校であったことには間違いはなく、活字による天草本は江戸の木版本より進んでいたのではないか。宣教師たちはさいしょ有馬とか大友とか領主に結びついたが、専制君主としての直観力をそなえた秀吉、家康によって弾圧が始められ、領主や高級武士たちが転向ないし追放の道をとると、人民に一そうつよく結びつき、素朴にして純真な日本人の逆感化をうけて、本国における以上に民衆的つまり近代的となったと考えられる。島原の乱のときは外人宣教師はもはやいなかっただが、その新精神は乱の戦闘経過に明らかで、二万五千の農民兵をもって幕府軍十二万五千を三月ささえて常に優勢を保ち、兵糧つきて全員玉碎したキリシタン方には近代的協同があるのに対して、諸藩軍には封建的利己性が露骨にあらわれている（鍋島藩が退却しかけるので、総司令部から立花藩出よと命令してきても、危しと見ると我が軍は目下朝めし中でござる、などと答えてサボっている）。このような近代の萌芽が一六三七年、島原の乱によってすべてつみとられてしまふのである。それはデカルトが『方法叙説』をもつて西洋近代哲学をひらいた年にあたる。

もちろん思想はつみとられるものではない。キリシタンが明治までひそんだことは周知のとおりで、思想弾圧の無効を明示している。ただ私が無学にして今まで知らなかったことは、御一新ときいてかわらぬ信仰を公示した信徒を明治政府が弾圧し、これを諸藩に分つて追放し、列国に抗議されるキリスト教とキリシタンとは別のものだ、と答えてゴマカソウとしたこと、キリシタン禁制の制札は実に明治六年に至つて初めて除かれたことである。明治政府の性格が、ここに端的に示さ